

冬休みが終わり、1 年間のまとめの時期、3学期に入ります。冬休み中は、ご家庭でもテレビで見たことや読んだ本、習い事などについてお子さんと話をされる機会も多かったと思います。教科書や問題集を読んで、わかった！できた！と言っても、後で聞いてみるとわかっていないと言うことはありませんか？学校でも、教科書の大切な部分に線を引くなどの活動を取り入れて授業を行っていますが、線を引いたことで満足し、わかったつもりで実はわかっていないということがあります。

記憶に残るかどうかは頭の使い方次第

私たちは五感を通じて何か情報を得たときに、それに対して何らかの処理を行います。このときに、頭をよく使う「深い処理」をしたときほど記憶に残りやすくなることが知られています。文章を読むような文字情報の処理であれば、形態的処理→音韻的処理→意味的処理の順に処理が深くなっていき、記憶に残りやすくなります。これを処理水準説と言います。

いくつかの単語のリストを用意して、1つひとつのことに對していろいろな質問に回答させます。形態的処理であれば、「ダイコン」という単語に対して、「漢字ですか？カタカナですか？」といった質問をします。音韻的処理であれば、「筑紫山地」という単語に対して「つくしさんちですか？ちくしさんちですか？」のように質問します。意味的処理であれば、「キャベツ」という単語に対して「どちらに典型的に当てはまりますか？高冷地農業／促成栽培」のように質問します。

このとき、実験参加者たちには、「出てきた単語を覚えてください」とは言いません。ただ、質問に答えてもらうだけです。しかし、すべての単語についての質問のあとで、どんな単語が出てきたかを思いだすように指示されると、最も思い出せるのが意味的処理、次に音韻的処理、最も思い出せないのが形態的処理をした単語になります。意識して覚えようとしなくても、深い認知的処理、要するに「頭を使う」ことをすると、自然と記憶に残るのです。

小学生の子でもできる比較的簡単な方法は、誰かに教えるつもりで読むということです。ワシントン大学のジョン・ネストイコらは、学生たちを2つのグループに分けて、それぞれにこう伝えました。一方のグループには、「このあとテストがあるぞ」、もう一方のグループには、「このあとで別の学生にこれを教えてもらうぞ」と。その上でテキストの文章を学習させました。すると、「教えるつもり」で学習したグループのほうが、全体的に内容を正確に思い出せる確率が高くなり、重要どころほど特に記憶に残っていました。

<参考>菊池洋匡「『記憶』を分析してわかった 小学生の子の成績に最短で直結する勉強法」実務教育出版

学校でも、算数科で問題の解き方を説明させたり、国語科で自分の考えの根拠を話させたりと、学級の友達を相手にした、さまざまな「教え合い」を取り入れています。ご家庭でもぜひ、本を読んでいるお子さんに「どんなことが書いてあったか、あとで教えてね！」と声をかけてみてください。意気揚々と誇らしげに学んだことを教えてくれることと思います。

